

山梨県東八代郡八代町郷土館所蔵の長着について

齊藤 秀子・石山 正泰

The Folkways of Clothing in Yamanashi Prefecture(4)
"Nagagi" in the Museum of Local History of Yatsushiro

Hideko SAITO, Masayasu ISHIYAMA

1 はじめに

著者らは山梨県の衣生活に関する資料を整理、山梨県の明治期から昭和初期までの衣生活のあり方を明らかにすることを目的として、文献調査の結果^{1) 2) 3)}、および、山梨県東八代郡一宮町民俗資料館所蔵のシュロ製ミノについて⁴⁾報告した。ついで、東八代郡八代町郷土館所蔵のミノ2点、山袴2点、長着2点について詳細な調査を行い、この内、山袴2点について⁵⁾報告した。今回は、さらに長着2点についての調査結果を報告する。

2 調査資料

八代町郷土館は昭和52年に開館した郷土館である。故大森慶二郎氏の屋敷跡を本館とし、民俗資料館としての江戸中期農家をあわせた構成となっている。衣生活に関係した所蔵品の詳細については研究ノート(2)²⁾に示したとおりである。今回調査した資料は本館2階に所蔵の衿長着2点である。

3 八代町郷土館所蔵の長着

1) 衿長着(資料1)

図1に八代町郷土館所蔵の衿長着(資料1)を示した。

① 材料

この衿長着の材料および色は次のようであった。

表地	材料	絹
	柄	経縞4色
		経糸 紺、エンジ、黄、黄緑

	緯糸 紺
糸密度	経 26本/cm
	緯 22本/cm
厚さ	約0.23mm
組織	平織
裏地〔袖、衿〕	
材料	綿
柄	緋色、無地
組織	平織
〔見頃〕	
材料	綿
柄	生成、無地
組織	平織
〔裾〕	
材料	絹
柄	藤色、無地
組織	平織

② 寸法および仕立て方

表地は紺、エンジ、黄、黄緑の縞模様で、素材は絹である。裏地は身頃は生成の綿、袖、衿は紺の綿、裾回しに藤色の絹が用いられている。

本資料の構造を「新しい寸法による図解式和服裁縫後編」(1965)⁶⁾に掲載されている衿長着の構造と比較した。その結果、両者はほぼ同じ構造で、現在、衣生活の一部として用いられている長着とはほぼ同じ構造であった。

この衿長着の特徴は「こしあげ(腰揚)」があることである。衿を調節するために、肩山を中心として前身頃から後身頃にかけて縫い揚げするこ

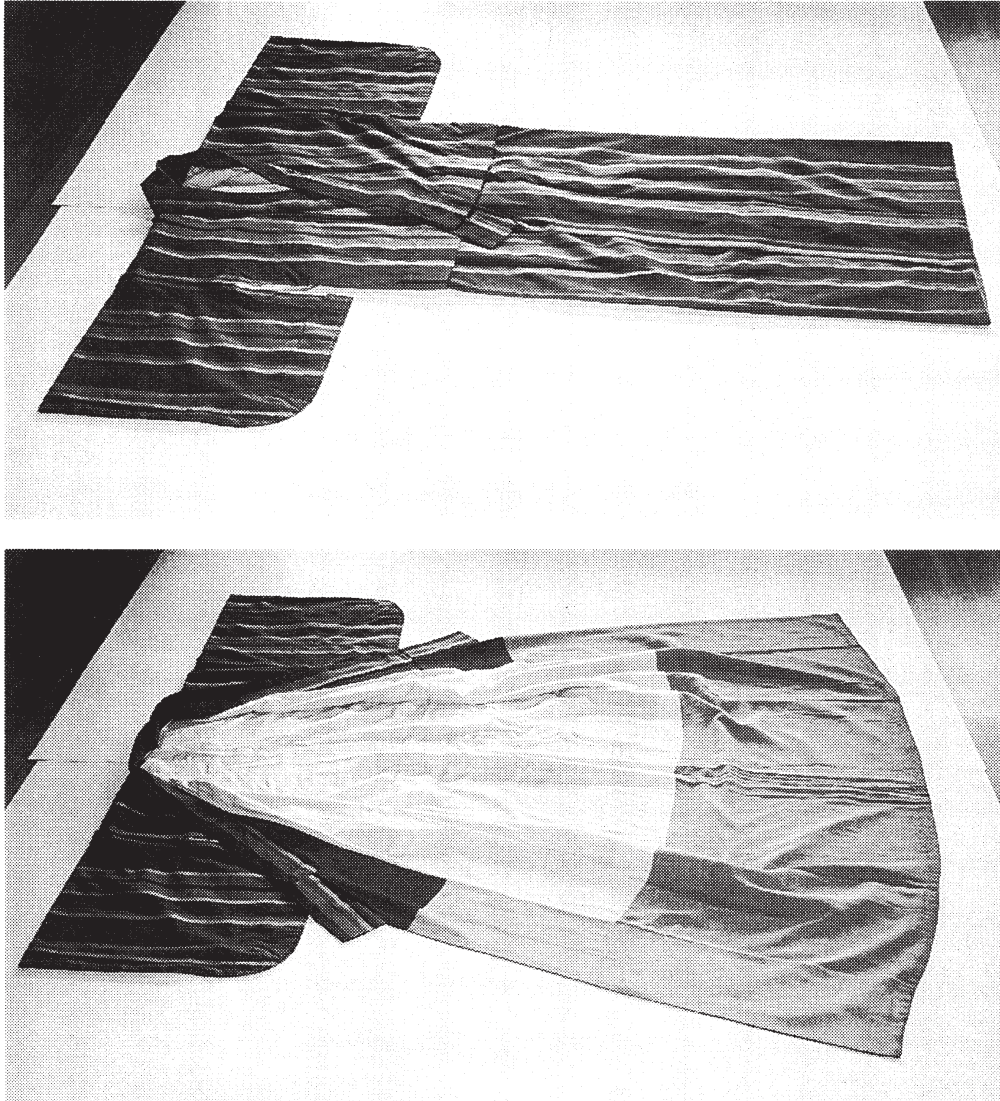


図1 八代町郷土館所蔵の衿長着(資料1)

とを肩揚げ、丈を調節するために腰の位置を縫い上げることを腰揚げという⁷⁾。「腰揚げ」は、「肩揚げ」とあわせて子どもの成長に合わせて、着物の寸法を調節するための工夫で、現在でも子ども用の浴衣、衿長着に施されている⁸⁾。このことより、資料1のように揚げをしてある着物はおとなものではない。肩揚げがなく、腰揚げのみ施されているばあい、肩揚げをする必要がないと考えると、少女期に着用した長着であったと推測される。

表1に測定した衿長着の各部寸法および現在の衿長着の標準寸法例を示した。揚げ寸法を除き、特に目立った寸法上の特徴はなく、袖口がやや小さめにできている程度であった。衿は現代の衿長着の場合一般に幅の広い「広衿」に仕立てる場合が多いが、この長着の場合、現代では「ゆかた」の

仕立てに用いられることの多い幅の狭い、5.5cm幅のばち衿仕立てであった。

2) 衿長着(資料2)

図2に八代町郷土館資料の衿長着(資料2)を示した。

① 材料

この衿長着の材料は次のようである。

表地	材料	絹
	柄	経縞4色 経糸 紺、エンジ、藤、ベージュ 緯糸 紺
	糸密度	経 35本/cm 緯 31本/cm

表1 八代町郷土館所蔵袷長着の各部寸法

	単位 cm			
	八代町郷土館所蔵 袷長着（資料1）	八代町郷土館所蔵 袷長着（資料2）	女物長着標準寸法 ⁷⁾	男物長着標準寸法 ⁷⁾
特徴	背縫いで7cm、脇縫いで5.5cm腰揚			
袖丈	37.0	56.0	50~61	53.0
袖口	20.3	21.5	23.0	28.0
袖付け	21.0	24.0	23.0	44.0
袖幅	32.5	32.0	32.5	34.0
袖の丸み	9.0	なし	2.0	2.0
身丈	143.8	137.5	150内外	136内外
衿下	71.4	68.0	76.0	66.0
おくみ下がり	22.5	20.0	23.0	19.0
身八つ口	16.5	11.5	15.0	
衿肩あき	9.5	9.5	8.5	8.5
くりこし	1.0	1.0		
衿	62.0	61.0	63.0	66.0
肩幅	29.5	29.0	30.5	32.5
後幅	28.7	27.5	28.5	32.0
前幅	23.5	22.0	23.0	25.0
おくみ幅	14.5	14.0	15.0	15.0
合づま幅	13.5	14.5	13.5	13.5
衿幅	5.5	11.0	11.5	5.5
衿幅（えり先）	7.5	11.0		
袖口のふき		0.4		
すそのふき		0.8		
内揚げの位置				肩山から51.0



図2 八代町郷土館所蔵の袷長着（資料2）

厚さ	約 0.14cm
組織	平織
裏地〔袖口〕	
材料	絹
柄	黒、無地
組織	朱子織
〔袖山部分〕	
材料	綿
柄	朱色、無地
組織	平織
〔袖、見頃〕	
材料	綿
柄	橙色、無地
組織	平織
厚さ	約 0.09mm
〔裾回し〕	
材料	絹
柄	濃紺、無地
組織	平織
厚さ	約 0.12mm

表地は紺、エンジ、藤、ベージュの経縞模様で、素材は絹である。裏地は袖、身頃は橙色の絹、袖口に紺の黒、肩山部分のみ朱色の綿、裾回しに紺の絹が用いられていた。

② 寸法および仕立て方

資料2の寸法は表1に示したとおりである。身丈が137.5cmと短く、「袖丸み」がないところを見るとこの長着はおはしりをしないで「つい丈」に仕立てる男物であるとも推察される。しかし、衿は一般的に男物の仕立てには用いられない幅11.0cmの広衿となっている。さらに、この長着の場合、裾に5cmの薄い綿入れとなっており、袖口も綿入れである。

3) 八代館所蔵の長着の特徴

着物というと広く和服のことをさすが、多くの場合長着のことをいう。長着は和服姿の主体をなし、長着をきて帯をしめることによって和装が完成する。衿長着は単長着に対し、表地に裏地を縫いつけたものである。裏地のつけ方は⁶⁾ ⁷⁾ 男物は「通し裏」に、女物は「胴裏・裾回し」に仕立てるのが一般的である。「胴裏・裾回し」とは胴の部分と裾の部分に分けて仕立て、裾回しは表地の色に合わせた色、上質の素材を選ぶなどの工夫が

される。このような和服の一般的な仕立て方を基に資料2を見ると、先に述べたように身丈が短いことを「つい丈」に仕立てたとし、「袖丸み」が無いという2つの点からは男物と考えられ、「広衿」であること、「胴裏、裾回し」の仕立てであることから女物と考えられる。しかし、「新しい寸法による図解式和服裁縫後編」⁶⁾にはその表題にも示されているように、身長や腰囲から長着各部寸法を計算する方法が掲載されている。その寸法表をみると、身だけは身長と同寸とあり、最小の寸法として145.0cmを挙げてある。このことから、資料2の場合、137.5cm前後の身長の人が着用できることとなる。また、資料2の柄は、細かい縞柄であることを考え合わせると、高齢の女子が着用した衿長着とも推測される。

一方、資料1の特徴は揚げをしてあることと、鮮やかな色調の大きな縞柄であることである。「新しい寸法による図解式和服裁縫後編」⁶⁾には外出着、街着の着装例、長着と帯の組み合わせの実例などが掲載されている。これらの例は、発行された昭和40年代のあるいはそれ以前の長着の標準的着装例とすると、資料1の縞柄はこれには該当しない。また、素材は絹であり、普段に用いられたものではないことは容易に察せられるが、このような絹の縞柄の長着着用が昭和初頭の少女期の特徴であったかどうか、あるいは芸能用など特殊な場合の着用であったかは不明である。

5 おわりに

東八代郡八代町郷土館所蔵の長着2点について詳細な調査結果を報告した。資料1は少女期に着用された衿長着、資料2は高齢の女子に着用された衿長着ではないかということが推測されたが、使用された年代についての推測は困難であった。

資料の着用された年代や着用者の推定には、その構成、寸法、および材料、柄などが参考となる。今後、このような山梨県での資料収集とともに、和服を含めた当時の衣生活についても参考としながら検討を進める必要がある。

本調査に当たり、本学生活科学科卒業生小林香代子さん、増田佑美さんの協力を得た。ここに感謝の意を表する次第である。

参考文献

- 1) 斉藤秀子、石山正泰 (1996) : 山梨県の衣生活研究ノート(1) 明治期から昭和初頭の東八代郡の衣生活について 山梨県立女子短大紀要 第 29 号 139-146
- 2) 斉藤秀子、石山正泰 (1997) : 山梨県の衣生活研究ノート(2) 明治期から昭和初頭の西八代郡の衣生活について 山梨県立女子短大紀要 第 30 号 141-150
- 3) 石山正泰、斉藤秀子 (2000) : 山梨県の衣生活研究ノート(3) 東八代郡、西八代郡、市町村誌掲載の衣生活にかかわることばについて 山梨県立女子短大紀要 第 33 号 187-193
- 4) 石山正泰、斉藤秀子 (1998) : 山梨県東八代郡一宮町民俗資料館所蔵のシュロ製ミノについて—その材料, 構成を中心として— 日本服飾学会誌 第 17 号 70-75
- 5) 斉藤秀子、石山正泰 (1999) : 山梨県東八代郡八代町郷土館所蔵の山袴について 山梨県立女子短大紀要 第 32 号 175-188
- 6) 岩松マス著 (1965) : 新しい寸法による図解式和服裁縫 後編 雄鶏社
- 7) 服装文化協会編 (1979) : 服装大百科事典 上下巻、文化出版局
- 8) 木野内清子、金谷喜子、谷山委佐子、都築昌子著 (1987) : 基礎きもの、白水社

(2000 年 1 月 16 日受理)

